

## 4. 「大学院生による教育評価アンケート」全学的観点から見た現状と今後の課題

### 全学（大学院）的観点から見た回答の傾向

全学（大学院）のアンケート結果集計表をもとに、全体の回答傾向を検討した。

① 学位取得のための道筋が明確に示されている

全学の平均は 4.2 であった。「臨床心理学専攻」が 4.5、「人間文化専攻」が 4.3 と平均を上回っているが、「発達・学校心理学専攻」と「応用英語専攻」はどちらも 4.0 と少し低く、「生活福祉文化専攻」は 3.6 とさらに低い結果となっている。

② 提示されたカリキュラムは納得のいくものである

全学の平均は 3.8 であった。この設問の回答は「臨床心理学専攻」の 4.3 が平均を上回っている以外は、「人間文化専攻」3.7、「発達・学校心理学専攻」3.5、「生活福祉文化専攻」3.2、「応用英語専攻」3.0 と低い値を示している。

③ 授業時間割はバランスよく配置されている

全学の平均は 3.5 であったが、「臨床心理学専攻」と「応用英語専攻」はどちらも 4.0 で、平均を上回っている。しかし「人間文化専攻」は 3.3、「生活福祉文化専攻」は 3.0 で、「発達・学校心理学専攻」は、1.5 と下回っている。

④ 提供される科目の授業内容が明確に示されている

全学の平均は 4.2 であった。「人間文化専攻」は 4.7、「応用英語専攻」は 4.5、「臨床心理学専攻」は 4.4 と平均を上回っているが、「生活福祉文化専攻」は 3.6、「発達・学校心理学専攻」は 3.5 と平均を下回っている。

⑤ 個々の授業はシラバスに準拠して、適切に進められている

全学の平均は 3.9 であった。「生活福祉文化専攻」は 4.2、「発達・学校心理学専攻」、「人間文化専攻」は両専攻科共 4.0 と平均を上回っている。しかし「臨床心理学専攻」は 3.8、「応用英語専攻」は 3.5 と平均を下回っている。

⑥ 研究を進めていく上で、必要な指導教員が適切に配置されている

全学の平均は 3.9 であった。「発達・学校心理学専攻」は 4.5、「人間文化専攻」は 4.3、「生活福祉文化専攻」は 4.0 と平均を上回っていたが、「臨床心理学専攻」は 3.7、「応用英語専攻」は 3.0 と平均より低い値を示している。

⑦ オフィスアワー等、大学院生活を送る上で、教員に相談できる制度が整っている

全学の平均は 3.9 であった。「人間文化専攻」は 4.7、「発達・学校心理学専攻」は 4.5 で平均を上回っていたが、「臨床心理学専攻」は 3.9、「生活福祉文化専攻」は 3.4、「応用英語専攻」は 3.0 と平均を下回っている。

⑧ 研究科（専攻）、あるいは大学に、研究を進めていく上で、必要な図書、関連資料が用意されている

全学の平均は 2.3 であった。「生活福祉文化専攻」は 3.2、そして「人間文化専攻」、「応用英語専攻」の両専攻は、共に 3.0 と平均を上回っているが、「臨床心理学専攻」は 1.8、「発達・学校心理学専攻」は 1.5 という数値が示されている。

⑨ 自習室、研究設備等、学内の学習環境は十分に整備されている

全学の平均は 3.0 であった。「人間文化専攻」は 4.3、「応用英語専攻」は 4.0、「生活福祉文化専攻」は 3.2 と平均を上回っているが、「臨床心理学専攻」は 2.6、「発達・学校心理学専攻」は 2.0 と平均を下回っている。

#### ⑩ キャリア形成に関して、適切な指導、相談が行われている

全学の平均は 3.3 であった。「人間文化専攻」は 3.7、「応用英語専攻」は 3.5、「臨床心理学専攻」は 3.4 と平均を上回っているが、「発達・学校心理学専攻」と「生活福祉文化専攻」の両専攻科はともに 3.0 を示し、平均を下回っている。

#### 自由記述から見られる課題

全学のアンケート結果集計表から、個々の指導が行き渡っている事や、幅広く学ぶことができたと言う意見もあった反面、次のような意見が見られた。

- ・プロジェクト課題はなかなか難しかった。医中誌が閲覧できなかったのが残念であった。(生活福祉文化専攻)
- ・修論提出前に図書館の PC が借りることができなかったのは辛かった。院生を優先する等してほしかった。(人間文化専攻)
- ・専門演習の進み方が、消化授業のようで残念だった。
- ・集中講義を 1 年の中で詰め込まないで、2 年間の中でバランスよくしてほしい。(発達・学校心理学専攻)
- ・キャリア形成への指導がなく、不安が大きい。学内実習へのスーパーバイズの内容が、バイザーによって偏りがあり、十分な指導時間を確保できていない教員がいる。
- ・修士論文を書く上で、参考にしたい論文が図書館にない時があるため、心理学に関する論文をもっと用意してほしい。
- ・修士論文提出前のスタディールームの引っ越しなど、重要なスケジュールに関しては考慮してほしい。
- ・所蔵する雑誌が少ないと感じる。
- ・オンラインでの雑誌についても読めるのが少ない。(臨床心理学専攻)

今年度の特徴として、修士論文提出前の部屋の移動について書かれていた。改修工事のため、学内全体が部屋の移動等があつて落ち着かず、それを不満に思っている大学院生も多いように見受けられた。しかし、学内の移動は来年度まで続くことはない。各専攻科別に記したが、図書館の充実、カリキュラムの見直しに関しては、全学的な取り組みとして、解決の方向に向ける必要がある。

#### 評価結果のまとめと改善のための取り組み

本年度実施された「大学院生による教育評価アンケート」の回収率は 74.2%となっており、これは昨年の 86.8%より下回っている。回収率が 100%の専攻科もあるが、55.6%と低い専攻科もある。今後は回収率をできるだけあげるよう検討する。また、問題点として、大学院生数が少ない専攻科では、回答者が特定される恐れが大学院生にあることがあげられた。回答者が特定されない方策を考える。

評価項目で平均点の低いのが「⑧研究科（専攻）、あるいは大学に、研究生活を送る上で、必要な図書、関連資料が用意されている」である。これは昨年のアンケートより数値が低くなっており、少しは改善の兆しがあるのかも知れないが、しかしまだまだ充分ではない。

次に低いのが「⑨自習室、研究設備等、学内の学習環境は十分に整備されている」という項目である。これも⑧の項目同様、大学の施設設備への指摘で、この点においても学習環境の充実を一層進めていく必要がある。

最後の「⑩キャリア形成に関して、適切な指導、相談が行われている」という項目については、「個々の指導が行き渡っていて、先生方に相談し易い」と言う自由記述等がある反面、全体の平均点が他の項目より低く、しかもどの専攻科も平均点に大差がない。これは、キャリア形成に関する適切な指導や相談に関する方法を、さらに充実するように考えていく必要がある。

また「③授業時間割はバランスよく配置されている」という項目では、上記 3 項目の次に低い平均点となっていて、特に専攻別で落差がみられる。平均値を下回っている専攻科は勿論であるが、全体的に見直し、大学院生の学習環境を充実させる必要がある。

「よかった点」より「改善すべき点」を項目毎に検討し、できる限り学習環境を整えるような方向に進めるべきだと考える。

文責：吉野 啓子（人間文化学部英語英文学科 FD 委員）